



What are Little Dieties Made of?

「一」

深緑の木々を揺らす心地よい山の風が、衣から覗く素肌を撫でてゆく。幻想郷を眼下に望む妖怪の山、その山頂に構えられた社殿には、初夏の暑さもまだ遠い。

守矢神社の境内には、そこに祀られる二柱の凸凹神様と、黒の魔法使い、そして紅白の巫女の姿があった。

「というわけでご飯を奢ってもらいに来たわ」

「来たぜ」

「帰れ」

胸を張って飯をたかるといふ高等技術を披露する二人に、神様二人は声を揃えて言い返す。

「なんだよ吝嗇臭いなあ。見ろ、霊夢なんかもう二日も白湯しか飲んでないんだぞ」

「えへん」

「そこで何故誇らしげなのかさっぱり分からないんだけど」

悪びれる様子もない霊夢に、諏訪子はげんなりとした表情でつぶやいた。神奈子もまったくと頷き、魔理沙の方に視線だけを向ける。

「……そっちの魔法使いは今に始まったことじゃないが」

「おいおい、酷い扱いだな？」

「あー。ともかく！ 巫女が自分とこの神社ほっぽり出して何してるんだ」

「だって、ここに来ると黙っててもご飯が出てくるんだもの。」

「おまけに涼しいし」

巫女としてどうなのかと思われる実に現金な台詞に、魔理沙までもがうんうんと深く頷く始末。

神奈子は顔を覆って天を仰いだ。

「つくづく世も末だな」

「だって、神様へのお供え物を私が食べちゃう訳にはいけないでしょう」

「そこへ行くと、ここには名目通り神様が手足口と揃ってましますからな、ご相伴に預かるには丁度いいわけだ」

「……私達の食い扶持にたかるのはいいつてわけ？」

「余所は余所、うちはうちよ」

半眼の諏訪子にきっぱりと答える霊夢。後ろめたさの一つも感じさせない言動に、博霊の巫女の底知れなさを改めて思い知る二柱だった。

「やめとけ諏訪子、こりやもう何言っても通じそうにない」

「……そだね」

神奈子が首を振り、諏訪子もがつくりと肩を落とす。

「よし、許可が出たな」

「そうね」

魔理沙と霊夢はいえー、と笑顔で手を打ち合わせると、ぽいぽいと靴を脱ぎ捨て、縁側にあらりこんだ。慣れた手つきでお茶の用意を始める二人に、神様二人顔を見合わせは揃って重く深い溜息を吐く。

「まったく、神にたかるとは実に傲岸不遜な」

「何言ってるの。神様なんだからお願いの一つや二つ気前よく叶えなさいよ」

「で、今日の晩飯は何だ？」

冷えた麦茶を揃って飲み干し、軒下の日陰の中に素足を伸ばし、すっかりくつろいだ様子の二人。

「……あーうー。暑いからさっぱりと、素麺にでもしようとか言った覚えがあるけど」

「えー？ もう少し脂気の強い方がいいわね」

「晩飯たかりに来た分際でその図々しさはある意味羨ましい」

「ふむ。そういえば早苗はどこだ？」

こんなときにはまず割って入ってくるだろう守矢神社の風祝の姿を探す魔理沙。

「朝早くから出かけていったよ。今日も里の方に用事があるんだそうだ」

「最近帰日も遅いよねえ。熱心に信仰を集めてるみたいだし」

「どこかの巫女にはぜひ見習って貰いたいものだな」

博霊神社に加え、命蓮寺と言う強力な対抗馬が現れる中、守矢神社も積極的に信仰獲得に乗り出している。妖怪の山の山頂という立地に加え、社殿に括られているためどうしても行動に自由の利かない二柱の代わりに、人里の信仰の多くは早苗が中心となって集めていた。

そこここに分社を建て、教えを説き、妖怪退治に東奔西走。一陣の風とともに颯爽と現れ、異変を解決したり解決しなかったり、時には騒動をいつそう混乱させたりして疾風のように去ってゆく守矢神社の風祝は、もはや幻想郷の風物詩であった。「このところ、良いことがあつたみたいでなんだかやけに機嫌が良かったようだ——」

「……また？ なんだか嫌な予感がするわね」

「心外だねえ。まるで私達が何か企んでるみたいじゃないか」

「みたいじゃなくてそうなのよ」

不満げに口を尖らせる諏訪子に、霊夢がぼそりと釘を刺す。

ここ最近の騒動の、割と大半が守矢神社のせいであるのは良く知られている話だ。

「早苗も随分馴染んだもんだな。こっちに来てからも結構経つから、当たり前っちゃやそうなんだろうが」

「少しばかり馴染み過ぎじゃないかと思うがな」

神奈子は腰に手を当て、眉間の皺を深くする。

「人里での覚えが良くなるのは分からんでもないが、袴の丈も

短くするし、髪も弄るし。装飾品まであれこれと。巫女としていかんだろう、あれは」

「いいじゃないさ。女の子なんだから、少しくらいお洒落したつて」

外見そとみのことなんてお互い言える格好じゃないんだしさ、と諏訪子。

「いや。こういうのは最初が肝心なんだ。悪い虫でも付いたらどうする？ 大体だな……」

巫女の在り方についてあれこれと言い争いを始めた二柱を見、霊夢と魔理沙はお茶受けの水羊羹を口へと運ぶ。

「あむ。……ああいうのも親馬鹿って言うのかしらね」

「ま、信仰が増えるのは悪いことじゃないんだろ」

「……そこでなんでこっち見るのよ」

「いやあ。他意はないぜ？」

「……………」

半目の霊夢が無言でちやきつと匙を手にとると、魔理沙も水羊羹を庇うように立ち上がる。こちらでは実に意地汚い争いが始まるうとしていた。

そんないつもの夏の日常が繰り広げられる境内の中、爽やかな風が軒先の風鈴をちりんと揺らす。

「ただ今戻りましたっ」

中庭に落ちた声に皆が顔を上げれば、そこには渦中の人とな

った早苗の姿があった。

守矢の風祝は白青の巫女装束を靡かせ、涼やかな風を纏いながら庭へと着地する。

こちらに來たばかりの頃は、ひと飛びするたびに轟々と旋風を吹き散らし、危なっかしいばかりだったが——いまでは風を手足のように操り、すっかりこちらの流儀にも慣れているようだった。

幻想郷での暮らしは、風祝の名に恥じぬだけの実力を身につけさせているらしい。

「よ、邪魔してるぜ」

「あ。霊夢さん、魔理沙さん。こんにちわ」

「お帰り早苗。今日も御苦労さま」

鷹揚に迎える神奈子は、早苗がその胸元に抱いた小さな布包みに目をとめ、眉を跳ねさせる。

「……………あれ？」

傍にてつと走り寄った諏訪子も目を丸くしていた。

早苗がその胸に抱きかかえていたのは、まだ生まれたばかりと見える赤ん坊だった。艶やかな碧髪をした赤子は白い布にくるまれ、すやすやと寝息を立てている。

「早苗、どうしたのその子？」

「どこかで預かってきたのか？」

揃って赤ん坊の顔を覗きこむ守矢神社の神様たちに、早苗は

満面の笑みで答える。

「そうなんです！ 聞いてください神奈子様、諏訪子様っ!!
赤ちゃんができました!!」

「早苗エーーーーっ!!」

風祝のご乱心に、二柱の絶叫が境内に響き渡った。



「さ、さな、さなっ」

「サナトリウム？」

胸に我が子（自称）を抱いたまま、こくと可愛らしく首を
傾げる早苗に、いやいやいやと二柱は揃って手を振る。

「さ、さささささ早苗？ その、どういふことかな？ いや

あ、最近めつきり耳が遠くなっていけないねえ!? そ、その子
がなんだって？」

「はいっ、赤ちゃんです!!」

「……誰の？」

「わたしのです!!」

はつきり、きつぱり、爽やかな笑顔で言い切られて。

「……げっ」

「ああっ、神奈子っ!」

なにか神々しい液体を吐きつつ、八坂の軍神はその場にぶつ
倒れた。慌ててその身体を抱え起こし、諏訪子は恐る恐る早苗
の方を振り向く。

「え、えっと——早苗、冗談だよな？」

「いいえ？」

何言ってるんですかとばかりに、早苗は胸に抱いた赤子のふ
くよかな頬をそっと指でつつき、愛おしげにその額に頬を寄せ
た。整った顔立ち、陽に透ける美しい碧の髪。赤ん坊には確か
にはつきりと早苗の面影がある。

何度もその顔を見比べ、諏訪子は「くりと唾を飲み込んだ。

「ちよ、ちよと待ってくださいいな早苗さん？ 赤ちゃんっ

そんな簡単に言うけど——ち、父親は？」

「いませんよ？」

「がッ!」

さらにと強烈な事を言われ、倒れ込んだままの神奈子の身体
がびくんとけ反った。

「ああ!? しっかりしろ神奈子、傷は浅いぞっ!」

「いや……らめえ……さ……っ、早苗は、そんなこと言わない
……っ、言っちゃらめなのお……」

錯乱する神奈子の肩を掴んで、思い切り揺さぶる諏訪子。し
かしそんな二柱に追い打ちをかけるように、早苗はばあつと明

るい笑顔で、

「ずうっと頑張ってたんです！ お二人をびつくりさせようって思ってた！」

「あばばばばばば……」

「うわ、神奈子っ!? おい、帰ってこいっ、行くな、逝っちゃだめだ、こら、神奈子——っ!?」

威厳もへつたくれもなく癡癡し、人語すら発せぬままに泡を吹き始める八坂の軍神。たとえ敬虔な信徒とて、百年の信仰も一目で根こそぎ吹っ飛びそうな有様だった。

そのまましばらくもがいていた神奈子だが、やがてふつりと糸が切れたように動かなくなる。

「きゅう……」

やけに乙女チックな倒れ方をする相方の顔を覗きこみ、諏訪子は肩を竦めた。

「……あーうー。神奈子にやちよつと刺激が強すぎたか……」

こんな姿形なりしといっておぼこいからねえ、この子は……」

倒れ込んだ神奈子を膝上に寝かせ、諏訪子はそつとその額に濡れた手拭いを載せてやった。

「……本当っぽいわね」

「みたいだな」

一連のやり取りを蚊帳の外から眺めていた霊夢と魔理沙も、顔を見合せて囁き合う。

——と、周りが騒がしくなったからか、不意に早苗の胸に抱えられた赤子が目を覚ました。

「ふええええ……!」

「あらあら、ごめんね、起こしちゃったわね」

元気の良い声で泣き始めた赤ん坊を、早苗はすっかり母性に溢れる仕草でよしよしとあやす。邪気など根こそぎ浄化されそうな、慈母の笑顔だった。

「……んー、お腹すいちゃったのかな？」

赤ん坊の顔を覗きこんで、早苗はふいと顔を上げ、

「諏訪子さま」

「な、なんででしょうか早苗さん」

いきなり話を振られて思わず敬語になる神様。早苗はよいしよ、と赤ん坊を胸に抱いたまま立ち上がり、

「私、この子の世話がありますから、少し失礼しますね」

「……う、うん」

「ありがとうございます。……はいはい、すぐにごはんにしましょうね」

にこにこ赤ん坊に話しかけながら、早苗は襖の奥へと消えてゆく。黙ってそれを見送っていた一同は、閉じた襖の前で一斉に息を吐いた。

「……な、なんか無駄に緊張したぜ」

「あーうー……」

倒れたままの神奈子を膝の上に、こちらもだいぶ気疲れした様子の諏訪子。やれやれと汗を拭い、魔理沙は二柱の元へ歩み寄る。

「……で、どうするんだ、あれ」

「どうするって、産まれちゃったものはどうしようもないんじゃない？」

「そりやそうだが」

あまり動じた様子のない霊夢の隣で、魔理沙は巫女がそれでもいいのかと眉をしかめる。

「でも、確かに気になるわね。……誰なのかしら、父親」

霊夢の疑問はまことに当然のもだったが、その言葉に一同の間には気まずい沈黙が流れる。

「本当に心当たりとかないの？ あんたたちのところの巫女でしょう」

「そんな事言われても……うーん、ここにはそんな相手もいないはずだしねえ。来るのは妖怪ばかりだし、何かあったらいくらなんでも気づくよ。あるとすれば里のほうだけ……」

お使いなどの用事で早苗が人里に出かけることはいつもの事だが、流石に考えにくいというのが正直なところだった。神社の外で神様も知らない人間関係を持つていることはありえないとは言い切れないが、早苗の性格からして、まず何か報告があつてしかるべきだと、諏訪子は思うところを述べる。

「確かに里の方におつかいは頼んでたけど、……無断外泊があつたとかそういうのはなかったし……」

「やることやるだけなら一刻もあれば十分でしょ」

「あばばばばば」

「……だからこれ以上話をややこしくするな」

さらりと言う霊夢に、魔理沙はやや赤くなった顔でツツコミを入れる。

「でも、まさか早苗だつてそういうの知らない訳じゃないでしょうに」

「……あーうー……」

「まあなあ……里じゃ珍しくもないことだしな」

よほど事情でもなければ、年頃の少女が誰かと添い遂げ、母となることはままある話だ。早苗の年齢であれば、すでに二児の母と言う例もないではない。

「けど、……いくらなんでもこんな事を秘密にしてるなんてのはねえ……」

「言い出せなかつたんじゃないの？」

「んう……」

「あ、神奈子、起きた？」

膝の上で呻いた神奈子に、諏訪子が大丈夫？ と顔を寄せる。

「だ……」

「だ？」

「騙されてるに決まってる……っ!!」

がばつと跳ね起きた神奈子の額から、ひゅんと手拭いが飛んで諏訪子の顔を直撃した。

「そ、そうだ、きつと不埒な輩に弱味を握られて、断りきれずに無理やり……っ!!」どこの馬の骨か知らないが、よくも早苗をそんな十八歳未満お断りの薄い本的展開に!

——ゆ、許さんっ、絶対に許さんぞーっ!!」

握り拳を固めわなわなと震えだした八坂の軍神は、齒を軋らせて膝立ちになる。

空は一転にわかにかき曇り、稲光耀く黒雲が沸き起こる。大気が震え、神社を取り囲むように嵐が吹き荒れはじめた。

「ウチの早苗に手を出すとは、身の程知らずにも程があるッ! 不届千万、神罰観面! その罪万死に値するッ!」

上げっぱなしのテンションに直結した空は、竜巻と見紛うばかりの嵐に包まれ、畏怖と驚嘆に満ち満ちた山の神への信仰はいざ人里へと狙いを定める。

「賛符『御射山御狩神事——』」

「落ち着け」

「へぶっ!」

注連縄に御柱を纏い、臨戦態勢になった神様の顔面に、飛んできた濡れ手拭いがべちんと張り付く。

「少し頭冷やしなつての、ばかなこ!」

手拭いを放り投げた諏訪子が、濡れた顔を袖で拭いながら叫ぶ。出鼻を挫かれ、天に沸き起こった神意は霧散してゆく。再び平静を取り戻す空と共に、ようやく八坂の軍神は我に返ったようだった。

「しっかりしてよ、本当に」

「ん——ああ。すまん。取り乱した」

まだわずかに腕が震えてはいたが、神奈子は深呼吸と共に咳払いをひとつ。

「し、しかし、流石にこれはまずいだろう……これまでもあれこれ厄介なことはあったが、今回はその中でもとびきりだぞ。もし天狗にでも嗅ぎ付けられたら——」

と、そこまで言つて。神奈子ははたと動作を止め、視線を陰しくする。

「神奈子!」

「——外かつ!」

諏訪子の意図を察した神奈子は、縁側から庭へと飛び出した。諏訪子もすぐ後に続き、おもむろに拍手を打ち合わせる。

ぱあん、と澄んだ空に響き渡る清涼な音と主に、近くの森の中で土砂の爆発が巻き起こった。

「きやああ——っ!」

飛び散る土煙の中、可愛らしい悲鳴が響く。

「そこか!!」

神奈子が渾身の力で振りかぶった巨大な御柱が、ずどんずんと轟音を立て、妖怪の山を串刺しにせんばかりの勢いで山肌に叩きつけられてゆく。

舞い上がる土埃の中から、転がり出してくる翼が二つ。

そのひとつが、地面を転がって突つ伏す。

「……手遅れだったか」

携帯型カメラを握りしめたまま目を回している姫海棠はたての姿を見、神奈子は深刻な表情で呻いた。

そして二柱が空に転じた視線の先。黒い羽根を散らし、もう一人の鴉天狗がふわりと舞い降りる。

「あやや。毎度どうも。ご愛顧を感謝いたします」

「やっぱりいたねバパラッチ天狗」

「ふふふ。事件あるところ射命丸あり。スクープと聞けばたとえ火の中の水の中。清く正しい射命丸、射命丸でございます」

「いくらなんでも早すぎやしないかお前」

選挙公報みたいな名乗りを上げる文に、魔理沙が突つ込む。

「お褒めに預かり光栄ですね。『文々。新聞』は日夜いち早く最新の情報をお届けするため、おはようからおやすみまで皆様を見守っているのですよ」

「平たく言ってストーリーカードよね」

悪びれた様子もない文に、神様たちは苦い顔。

「この前早苗に追っ払われたくせに、良くまた顔出せたもんだ。」

そんなんだから部下にも嫌われるんだよ」

「やれやれ。真実を伝える報道の崇高な理念が理解されないのはいつものことですが——いかな障害があるうとも、断固としてそんな圧力には屈しませんよ？」

にまりと笑みを浮かべる文。この鴉天狗の一番のうつつうしさは、一度や二度追い払ったくらいでまるで改めるということを知らない点だ。滅多に折れないほどの頑丈な鼻っ柱を持っているからこそ、人間に最も近い天狗などという位置を保ってられるのだろう。

「いやはや、ここ数日張りこんでいた甲斐がありました。早苗さんの事ですからそろそろなにかしらしでかすだろうと思っていました。予想以上の大スクープですよ。守矢神社の巫女さんに隠し子発覚!! これは今季下半期の特別賞も夢ではありませんね!! ——では、号外をお楽しみに!!」

「逃がすかつ!!」

言うが早いか、まさに疾風となつて空へと舞い上がった文に向け、飛び交う御柱に鉄の輪が普段の弾幕ごっここの数倍の容赦のなさで追いすがった。

しかし文は幻想郷最速の機動力に物を言わせ、それをひらりひらりと見事にかわしてゆく。

「ちよ……待ちなさい、文っ」

「しまった、こっちもか!!」

文に気を取られている間に、はたても目を覚ましていた。諏訪子がすかさず鉄輪を投げ打ち、その自由を奪う。

「ちよっ…や、め、何よ一体!？」

「待て!! ブン屋、こいつがどうなつても——」

「はたて!! あなたの犠牲は忘れませんっ」

「早いよ!!」

半秒も保たずに見捨てられる対抗新聞。

「く、ダメか、追いつけないっ」

文を追いつ天へと奔る八坂の軍神だが、元よりスピード勝負で天狗にかなうはずもない。みるみるうちに小さくなる文の姿に、神奈子は齒齧みする。

音すら置き去りにして空を征く天狗——もはや彼女を止める手立てはないかに思われた、その時。

突如眼前を塞ぐ『新聞勧誘お断り』の特大の符に、文はきょとんと瞬きをしていた。

「——あや？」

一瞬の間を挟み、空に盛大な弾幕が花開く。

「……一応、貸しにしておいてあげるわ」

鴉天狗の撃墜音の中、霊夢ははあ、と溜息をついて麦茶を啜った。

「二」

かくして。

天狗の墜落で大穴のあいた境内には、簀巻きになった天狗が二人並んで転がされることとなった。無論、カメラは取り上げられ、フィルムとネガは念入りに処分されている。

「うう……こんな話乗るんじゃないかったわ」

「まったく、役に立ちませんねえ、はたては」

涙を流すはたてとは対照的に、文は不敵な表情のままだ。

「なによ！ 珍しく一人じゃ手が足りないから共同取材なんて言うから付き合ってたのに、いざとなったら見捨てる気だったんじゃないの！」

「あんな出鱈目信じてたんですか？ 駄目ですねえ。折角のスクープを念^{せいしゅ}写で横取りされたら面倒だっただけですよ？ その点、近くに居れば最悪身代わりにもなりますし」

「酷っ!? わ、分かってたけどねあなたの性格くらいい！」

「……仲間割れはあとでやってくれるかね？」

二人の前に仁王立ちになり、神奈子は腰に手を当てる天狗達を見下ろす。『あの守矢の巫女に隠し子発見——か!?』——明日の紙面を飾るであろう、煽情的で偏見に満ちた文のネタ帳を

開いてその鼻先に突きつけ、

「さて、このピンク記事に対して釈明はあるかい？」

「まったくひどい誤解ですよ。これはあくまで、年若い巫女さんと、そのお子さんの交流を描いた記事でありまして。心温まる微笑ましいひと時を伝えるためのものです。断じてそのような邪な意図はありません」

「……本音は？」

「早苗さんの貴重な授乳シーンと聞いて飛んでまいりました」

「見せるか!!」

「でも早苗の授乳ならちよつと見てみたいかも……あ痛っ」

宙を舞った御柱が、カラス二人をまとめて叩き伏せる。

「はあ……予想以上に最悪だ」

「じよ、冗談よ！ わたしはそんなつもりはないってば!!」

文の隣ではたてが身の潔白を訴えるが、二柱の視線は陰しくなるばかり。天狗の新聞には山ほど前例のあることなので、信用がないのも仕方のないことだろう。

「大体ね、神様だって人気商売なんだ。そんな風聞立てられたらまったくもんじゃないよ」

「事実じゃないですか」

「ぐ……ま、まだ確証はないだろう！」

「いやあ、最近の早苗さんの行状を見るに割と時間の問題だったんではないかと——」

「やかましいよ!!」

苛立ち紛れに放たれる鉄の輪を、両手両足縛られたまま文はひよいと避けて見せる。

「さて、それはそれとしましてそろそろ核心に迫りたいのですが、守矢神社の巫女を見事娶ったのはいったいどちらの御方ですか?」

「——あ——」

「それは……」

不意を突かれ思わず視線をそらす二柱に、霊夢が脇から口を挟む。

「いないそうよ」

「あ、こら!!」

「ほほう!! と、いうことは未婚の母ということでしょうか!!? これはがぜんスキヤンダラスな方向ですね!!」

「面白がるなッ!! こっちは頭抱えてるんだ!!」

「神奈子、肯定してどうすんのさ」

「ふむ、これは良いですね。人里でも人気急上昇中、いまや里の若者たちの憧れの守矢の巫女が、まさかの火遊び!! おお、えろいえろい」

縛られたままぐねぐねと身を揺すり、テンションを上げっぱなしの文に、容赦なく弾幕が飛ぶ。

「……ねえ、早苗ってそんなに人気なの?」

「そうらしいな」

「へえ。中身知らないって大変ね」

しみじみと頷く霊夢。その横で文が眼を輝かせ、
「ふむ。……しかしそうしますと——」

穏やかな、けれどどこか物淋しい夕暮れの中。

手を引かれた幼子が、ねえ、と口を開いた。

『おかーさん』

幼子が見上げるのは、母と呼ぶには、まだ年若い一少女とも呼べるような年齢の娘だった。ともすれば姉妹にも見えるような二人を、けれどあどけない声は確かに母と呼ぶ。

『ねえ、おかーさん、どつしてわたしにはおかーさんがいないの?』

幼子の無邪気な問いがけだった。

けれどその問いに、母は哀しそうに表情を壊させるばかり。

母のただならぬ様子に、聞いた娘も顔を曇らせる。

『おかーさん、どこかいたいの?』

案ずるような娘の声に。母はきつく、涙をこらえて我が子を抱きしめた。

『……うつん。うつわ。……あなたのお父さんはね、神様よ』

『かみさま?』

きょとんと眼を瞬かせる娘に、母はもつ一度繰り返す。

『……そつよ。神様よ』

この子は私の子だ。

——何よりもただ、そのことだけを伝えたくて、小さな温もりを抱きしめる手に力を籠める。

夕日だけが、二人を見下ろしていた——

——というような路線はどうでしょうか！

「捏造もここまで来ると感心するよ!! あとそつちの天狗も『イける!』みたいな顔してメモ取るなっ!!」

こりずに鼻息荒く目を輝かせる天狗に、諏訪子は肩を怒らせて叫んだ。息も荒く、ずれかけた帽子の下から文を覗む。

「大体ね、そう言うならお前だって十分容疑者だぞ? 天狗」

「へ?」

私ですか? と文が呆けた表情を浮かべる。まさか自分に矛先が向かうとは思っていなかったらしい。

「ど、どうしてそうなるんですか!?! 仮にも報道に携わるものが取材対象に手を出すなんて、言語道断ですよ!! 馬鹿馬鹿しい。第一、私はこれでもれっきとした女性ですよ!!」

「そんなものは何とでもなるだろう」

「……なるのか?」

「それなりにね」

割と興味深々な魔理沙に、霊夢は答えてお茶を啜った。

「……やけに慌ててるね?」

歩み寄った諏訪子は、文の抗弁を遮りねめつめた。どろりと濁った瞳の奥に、土着神の頂点の迫力を見せ付けられ、さしもの文もたじろぐばかり。

「ち、違いますつ、断じてそんなことはありませんよ!! 以前宴会でご一緒したときに、いろいろとお話をさせて頂いた程度で……」

「え、そうなの? 前に人間にしてはよくやるとか、結構可愛いとか言ってたじゃない。この間だってプレゼントがどうとかつて——」

「はたて——!?!」

「ほほう」

挙動不審に陥った文を、ゆらありと神奈子が見下ろす。

「貴様かー!! 貴様が早苗をキズものに——?」

「あや×さな “……アリね!”」

「こらはたて!?!」

四面楚歌の文を、諏訪子と神奈子はじつと見下ろし、

「どうしよう。埋めようか?」

「そうだな」

「ちよ、ちよつと待つてくさいよ!!? しよ、証拠は? 証拠はどこにあるんですかつ!?!」

「お前ね、たまには鏡見た方がいいんじゃないか? ……大体、

天狗なんて神代の昔から助平と相場が決まってるんだ」

「ふ、風評被害反対——!!」

「「お前が言うな」」

一同の突っ込みはこれ以上ないくらいにハモっていたという。



午後の風が風鈴を揺らす。ゆつくりと傾き始めた陽の下、蟬の声は幾分強さを増していた。手の泥と額に浮いた汗を拭い、神奈子はふうむと腕組みをひとつ。

「……こうしててもしょうがない。兎にも角にも、早苗に確認しないことには始まらないな」

「そうだね」

「せめて埋め終わる前に気付いて欲しかったところですね」

「……なんで私まで……」

首から下を地面に埋められた天狗たちが目の幅涙を溢れさせる中、奥からふええ、と赤ん坊の泣き声が響く。

皆が思わず言葉を飲み込む中、渦中の早苗がぐずる赤子を胸に抱き、襖の奥から姿を見せる。

「なんだか騒がしいですね。せつかくこの子も寝付いたところ

なんですから、静かにしてください。……あら？」

庭の惨状を見回し、早苗は瞬きを一つ。

「どうしたんです？ 文さんもそんな愉快な格好で」

「いえその、色々深い事情がありまして」

埋められたまま、しどろもどろの文。霊夢と魔理沙はちゃっかり距離を取り、野次馬を決め込んでいた。

必然的に矢面に立たされた神奈子と諏訪子は、お互いに肘をつつき合う。

（ほら神奈子、早く聞いてよ）

（え、……いや、こー言うのはお前の方がいいんじゃないか？）

（私に押し付ける気!?!）

顔に疑問符を浮かべる早苗に、とうとう辛抱しきれなくなつた神奈子は、諏訪子の背中に回つて小さな身体をずずいと前に押し出した。

（諏訪子、まかせたつ）

（ちよ、卑怯者っ!?!）

貧乏くじを押し付けられ、諏訪子は思わず悲鳴を上げる。

「……？ どうしました？」

「え、ええと……」

（頑張れ、応援は任せろー!!）

（あーもー、こいつらは……）

後ろから無責任な応援と視線を送る神奈子と野次馬たちを、

後で見るとばかりにぎろつとひと睨み。

すうはあと深呼吸をひとつ挟み、固い唾を飲み込んで、諏訪子は早苗に向き直る。

「あーうー……。その……そろそろ話してくれないかな？ その子の……その、父親のこと」

腫れ物に触るような態度で訊ねた諏訪子に、早苗は不思議そうに首をかしげる。

「……？ 前にお話しませんでしたか？ いないって」

「うん。……その、話にくい事なのは解るよ。早苗も辛いことだと思う。でも、いつまでもそのままじゃいけないと思うんだ。こういうのは曖昧にしておくの後で良くない。その、早苗にも辛い事なのかも知れないけど——」

諏訪子はわずかに焦りをにじませつつ言うが、当の早苗は誰も認めてくれないことにいささか気分を害したようで、眉を逆立てて声を上げる。

「そう言う言い方はどうかと思います。前にも言った通り、父親なんかいません。この子は正真正銘、私の赤ちゃんです！」

「いや、だから早苗——」

意固地になるのは解るけど——と、汗をかきつつ応対する諏訪子に、早苗はもうつ、と口を失らせて立ち上がった。

「信じてくだらないなら仕方ありませんね、いまから実際にやってみせますから」

「は？」

「見ててください、神奈子様、諏訪子様っ」

突然の早苗の豹変に、埋められたまま身を乗り出す天狗。

「やめてー!!」

「早苗落ち着け、早まるな——っ!!」

制止のため飛び出しかける二柱だが、早苗のほうがずつと早かった。守矢の風祝は静かに目を閉じ、胸元に手を伸ばす。そうして彼女が行ったのは、二つの動作。

1. おもむろに髪飾りをはずす。

2. 地面にほうり捨てる。

——以上。

ぼん、と音を立てて、地面に落ちた髪飾りが煙に包まれ、そこから可愛らしい笑い声があがる。現れたのは一番目の子と同じように、早苗そっくりの碧の髪をした赤ん坊だった。

「誓約!!」

予想外の展開に顎を落としかけている皆の中、なぜだか早苗は自慢げな表情。

「どうですかお二人とも!!」

褒めてもいいんですよ？ と言わんばかりに胸を張って、あたりを見回す。しかし皆が言葉を失っているのが不満だったか

早苗はむうと眉を立て、

「むー。なんだか素っ気ない反応ですね。それじゃあもう二、三人行ってみましょうか」

「やめー!?」

守矢の風祝に、二人目のお子さんが誕生した瞬間であつた。



そんな訳で、およそ半刻ほど過ぎた夕暮の境内では二柱の神様がそれぞれ生まれ変わったばかりの双子を抱きかかえるという構図が出来上がっていた。

「あーうー」

「だうー」

二柱の胸の中で、赤ん坊は小さく声を上げ、つぶらな瞳をまっすぐに向けてくる。腕にかかる小さな重さを感じ、諏訪子はその愛くるしさに目を細めた。

「おー。よしよし。可愛いねえ」

赤子を抱き、あやす姿も堂に入ったものだ。かつて人の親となつた経験があるという噂がある神様だけに、見た目にそぐわず母の貫録たつぷりだった。

「いやはや……心底驚いたな」

一方、神奈子も、腕の中におっかなびつくり、翠髪をした赤子を抱いていた。こちらは軍神ゆえにこうした経験は少ないのか、諏訪子に比べると余裕が足りないようだった。

「赤ちゃんってあれで産まれるんだな……初めて見た」

「そうだね、神様やつてもう長いけど、正直吃驚したよ」

「おいその神様」

いいのかそれだと突っ込む魔理沙。

「……子持ち巫女かあ。ジャンルのにはニツチだよねえ多分」

「顧客獲得が課題だな」

「そこで真剣に検討されても微妙なんだが」

「いや、重要なことだよ？」

人里の信仰の——控え目に言つて何割かは、守矢神社の巫女さんへのものだ。年頃の見目良い少女がいれば衆目を集めないわけがない。特に、博麗の方に比べると主に若い男を中心に人気があるのだと文が補足する。

「相変わらずあんたんとこの巫女は全力で間違つた方向に信仰されるわよね」

「……言わないで」

それなりに苦労のあるらしい二柱は、霊夢の一言に目頭を押さえて熱い涙を流す。

「……そうだ。諏訪子、大事な事を忘れてたぞ」

「何？」

「この子達の名前だ！……どうしよう？」

「あー。そっか。一応どっちも早苗なんだよね」

赤ん坊に高い高いしながら、その顔を覗きこみ、諏訪子はむうと唇をへの字に結ぶ。

「あの髪飾りを核に、早苗の霊力が、この子たちの形を取ってるんだ。……すっごく変則的だけど、現人神としての早苗の分霊^{わけたま}みたいなのかな」

「いわゆる処女懐胎か。奇跡もここまで来たとはな」

「……他人事みたいに言ってるけど、聞いてる限りじゃ半分は諏訪子と神奈子が孕ませたみたいなものじゃない？」

「あー、霊夢お前も言葉選べ？」

こほん、と魔理沙は咳払い。

「それは解ったが、それだけじゃ赤ん坊の格好してる説明がつかない気がするぜ？」

「神格として産まれたばかりって言うのもあるんだらうけど、早苗自身の意識が強いんだらうね。……多分、そういうカタチを早苗が望んだんだ」

「……念のため改めて聞くんが、やっぱり早苗ってそのへん知らんわけじゃない、よな？」

「いまどきの子だからねえ……そんなわけないと思うけど」

信仰の枯れ果てた外の世界で、何十年目かに生まれた、稀代

の力を持つ神子として生まれた——守矢の風祝、東風谷早苗。そうした来歴ゆえ、神奈子のほうはやたらに箱入りにしたがることもあったが、概ね問題なく人並みに成長してきたはずだと諏訪子と思う。

「恋のひとつやふたつはしていたと思うよ。……成就したかどうかまでは言わずにおくけどさ」

それにね、と土着神の頂点にある神様は吐息。

「……外の世界じゃあの子の力は忌み嫌われるものだった。その事を大つびらにできないくらいにはね。あの子の家族の中で一番、過去の伝承や力を扱う事に長けていた祖母でも、早苗の才能には遠く及ばなかったよ」

でも、と諏訪子は言葉を切り、

「あんな方法で子供作れるなんて、よっぽど神格の高い神様くらいだよ？ 私や神奈子は言うに及ばず、独り身で神産みをしたなんて、記紀神話でもイザナギやらアマテラスの格になる。多くの神は普通に番いになって子を産んでるんだ。神とても、それが自然の理にかなったことだったってことさ。

……そりゃ早苗は人間としてはずば抜けた霊力を持つてるけど、いくらなんでもそんな簡単に。ねえ？」

「早苗の神徳がこれ以上ないくらいに高まつてるとことだらう。最近信仰集めにいろいろ頑張ってたみたいだからな」

「うー？」

あれこれと頭を悩ませる二柱の顔を、胸に抱かれた小さな命が丸こい指を伸ばして。ぺたと触れる。

あどけない笑顔を見せる小さな生命は、二柱の緊張をほどくには十分だった。

「……えへへ」

「……おー、よしよし。あばばば……」

威厳や戸惑いもどこへやら。その笑顔に、守矢の二柱の表情はでれでれと崩れてしまう。

「うーん……この子は目元が早苗似かな？」

「耳が早苗にそっくりだね。可愛いもんだ」

「えー？ 私の子のほうが可愛いってば」

「はっはっは。張り合うもんじゃないぞ諏訪子。一番は決まってるだろう」

「……へえ、じゃあ確かめてみる？」

「ふん、面白い」

にい、と不敵に笑う神奈子に、挑むように微笑む諏訪子。

ぶつかり合う視線と共に火花が散る。たちまちあたりには不穏な気配が満ち、吹き始めた風にざわざわと梢が波打ち、大地が鳴動を始める。

「なにをやってるんですか!!」

おとなげない理由で諏訪大戦の再戦を始めようとする二人だが——戦端が開かれるよりも先に、それを制する一喝が、境内

に響き渡った。

走り寄る早苗に我に返り、二柱は慌てて胸元に抱いた赤ちゃんの様子を窺う。

——が。

大の男でも裸足で逃げ出すであろう軍神の呼び起こす疾風や、祟り神の招く呪詛の顕現を目の当たりにしても、赤子たちは怯えるでもなく、きやつきやと嬉しそうに「機嫌だった

「……元気だな」

「大したもんだわ。流石の血筋ね」

「そりやそうさ。なんだって早苗の子だからねえ」

「そこでお前さんまで誇らしげなのがよくわからんが」

胸を張る諏訪子に、魔理沙はずれかけた帽子の下で呻く。

「そうですよ。……もう。お二人とも危ないことをしないでください!!」

「……はい」

「……はい」

「ごめんなさい」

しゅんと俯き、肩を落として風祝に叱られる神様二人。

「母は強しだな」

「……そういうものかしらねえ」

いまいちよく分からないといった体で、霊夢は縁側に腰を下ろしてお茶を啜った。

〔四〕

「お先にお風呂、頂きました」

夜も更ける時刻。濡れた髪を乾かしながら、寝間着姿の早苗が居間に声をかける。正装を解いてひとり、手酌で盃を重ねていた神奈子は、顔を上げてああと頷いた。

「神奈子さま。お休みになられないんですか？」

「……少し、そういう気分じゃなくてね」

「何かお持ちしましょうか」

返答も待たずに神饌しんせんの用意を始めてしまいそうな様子の早苗を、神奈子はしっかりと制する。

「気にしないでおくれ。今日は色々あつて疲れただろう、三人ともゆっくりお休み」

早苗はまだ何か言いたそうな様子だったが、神奈子はそれを寝間のほうへと追い立てる。

「それじゃあ、先にお休みさせていただきます」

「ああ、おやすみ」

申し訳なさそうな様子の早苗を見送り、神奈子は居間に戻って再度盃に手を伸ばす。白磁の盃に満ちた強い酒精が喉を焼く味に、そつと目を細めた。

程なくして、障子の向こうから声がかかる。

「……神奈子、起きてる？」

「お前じゃあるまいし。冬眠にや早すぎるだろう」

障子を押し開けた諏訪子は、いつになく真剣な表情。

「茶化さないで。大事な話だよ」

「早苗のことか」

「他に何があるのさ」

諏訪子は吐息をひとつ挟んで、神奈子と背中合わせに腰を下ろした。とん、と小さな身体が背中を預けてくる。

「流石に今日のは驚いたよ。早苗のする事はもう大概慣れたつもりだったけど、まさかいきなり母親になっちゃうなんてね」

「まったくだ。普通、もう少し戸惑うもんだろうになあ。順応性が高いのはいいことなのかもしれないが」

「神奈子はほんとに、早苗に甘いよねえ」

自分はそんなに酔っ払ってるくせにさ、と諏訪子は口を尖らせる。

「……どう思う？」

「私に聞くのは、ちよいと卑怯じゃないか？」

「そうだね。……言いたい事があるのは私の方だ」

そう言うと、諏訪子は神奈子の手から盃を取り上げて、くいと飲み干した。

ほんのりと染まった唇が幽かな吐息をこぼし、夜闇に鳴く虫

の声がわずかな沈黙を埋める。

「素直に言って、今の早苗の在り方は良くないと思う」
ぽつり、と。

諏訪子はそう切り出した。

「……早苗が、望んだ事だろう？」

「それでも、だよ」

崇られる神様は、共に祀られる軍神を見る。

「神奈子。私は、早苗を神になんてしたくないよ。神つてのは人が望むから在るものだ。私達^{神様}が人に願いを押し付けちゃいけない。……神を産むのは、人なんだよ」

「……………」

「早苗が人として、子の親になりたいっていうなら構わないさ。でも、あれは違う。どういう姿形をしていても、あの子たちは

早苗だ。神としての早苗の側面だ。

神奈子、あの子たちがどうして赤ん坊の格好で生まれてきたのか、分からないわけじゃないよね」

「……ああ」

そう。昼間諏訪子が言葉を濁したように、ただ、分霊というのであれば、赤子の姿を採る必要はないのだ。

にもかかわらず、早苗の分霊が赤子として生まれたのは、早苗自身がそうありたいと願ったからに他ならない。

つまり——家族。人としての絆。

「あの子は風祝で、女の子だからね。私達と家族になるために、一番自然で、問題のない形を選んだつもりなんだろう。流石に意図的なものじゃないとは思うけど」

神様であることと、血の繋がった家族であること。その二つを同時に満たそうとするがために、今回の騒動が起きた。恐らくそういうことなのだ。

「……早苗は確かに、風祝として稀代の力を持っていた。幻想郷の水土は、早苗によく馴染んだだろうね。もともと失われようとしていた信仰に根ざす力だ。失われた幻想の行き付く先こそが、あの子にとって相応しい世界だったのかもしれない」

そう考えるのは少し寂しいけれどね、と付け加えて。諏訪子は軽く肩をすくめてみせた。

諦めたつもりだった。枯れ果てた信仰と共に、忘却の彼方に失われる事を受け入れたつもりだった。

けれど、神を見、神と話し、神と共に笑う風祝の少女と共にいるうちに、それを忘れていたのだと、諏訪子は言う。

「あの子が人である限り、いつか私達との離別がある。私は、神のくせにそのことを恐れていたのかもしれない」

自分は喪われてもいいと言いつつ、それはただの独りよがり。己の血筋が、生まれながらに、子孫の生き方を縛っていたのではないか——

帽子の目玉と共にしよげ返る諏訪子の背中、そう語ってい

た。

そんな相方——ともに祀られるもう一人の神の見せる不安に、神奈子はふ、と息をこぼす。

「そんな事で悩んでいたのか」

「そんな事って——」

「それを言うなら、人のままでいて欲しいと願うのも、共にあって欲しいと願うのも、どちらも神の領分を超えたことじゃないのか？」

「……………」

「お前の言う通り。神は、人の夢と同じものでできている。

故に儚く、故に絶大であり、常に人と共にあり、そして同時に人から最も遠いものだ。

だからこそ、そんな私達が早苗の事を信じてやらなくてどうするんだ？ 自身の信仰と共に、この幻想郷まで共に付いてきてくれた、あの子を」

「神奈子……」

「心配するな。諏訪子」

ぼん、と諏訪子の頭に手を乗せて、神奈子はくすりと微笑む。

「早苗の願いは、早苗自身が決めるのだろうさ。それゆえの現人神だ。きっと、私達の想像もつかないことをしてくれる。それを信じておこうじゃないか。

案外、今回のことも残機が増えたぐらいにしか考えてないか

もしれないぞ」

「……それは流石にどうかなあ」

納得いかなそうな様子の諏訪子に、神奈子はひらひらと手を振って見せた。真面目な話なのに、と諏訪子は口を失らせる。

「あーあ。神奈子は生まれながらに神様だから、そのへんデリカシーないよねえ」

「……好き放題言ってくれるな？」

「そういう擦れてないところが好きだって言ってるの。言わせんな恥ずかしい」

諏訪子は頬を膨らませて視線をそらす。

「ま、そうだね。……この主神は神奈子だから、神奈子の判断に任せるよ」

「……無責任な」

「そういう約束だろう？ 神奈子が看板、私は裏方。ずっと昔にそう決めたじゃないか」

はあ、と諏訪子はもう一杯、盃を空にする。

「でもね、やつぱりちよつと心配なんだ。早苗が今、風祝を超えた力を持っているのは、信仰あつてのことだ。でもそれはこれまでの早苗を知る者たちが集めている信仰なわけさ。その早苗本人が変わってしまったとして、同じように信仰が集まるものかな？ ことによったら——」

「いまのあの子たちを生み出している神徳も、失ってしまうか

もしれない？」

「そういうこと」

もしそうだったとしたら——たぶん、早苗は悲しむだろう。どんな言い訳をするにせよ、あの赤ん坊たちは早苗の子であり、早苗自身でもあるのだから。

「それなら話は簡単だろう」

「へ？」

呆氣にとられる諏訪子に、神奈子は自信たっぷりに笑みを覗かせ、腕組みを一つ。

「私にいい考えがある」

「神奈子がそう言いだして上手くいった記憶がないんだけど」

微妙な顔をする諏訪子に、神奈子は苦笑い。

「いいから聞け。単純なことなんだ。神は信仰によつて存在できる。言い換えれば、忘却が神を殺すわけだ。……だとするなら、あの二人が新しく神様として祀ってもらえば万事解決、決らう？」

「……ああ、成程」

諏訪子もぼん、と手を叩く。神奈子はいっと齒を見せて、大きく腕を広げた。

「そして、幸いにしてここは、新しいものを受け入れてもらうためのルールがある。何も隠す事はないんだ。大々的にお披露目というじゃないか。もちろん今度は早苗たちにも秘密つて

訳にはいかないだろうがね。……なんなら天狗に話を付けてもいい。ちやうど貸しもあるところだしな」

「……また、博麗のところに五月蠅いこと言われそうだねえ」
「そういうものだろう、異変つてのは」

言つて。神奈子と諏訪子は顔を見合わせ、やがてくすくすと笑いあつた。

「よし。目度くまとまったことだし折角だ、一杯いこうか」

「前祝いねえ……皮算用にならなきゃいいけど」

「気に入らんらしいぞ？ 一人で呑む」

「……そんな事言つてないじゃんさ」

取り出した盃に、徳利の底に残っていた冷酒を半分に分け。守矢の二柱は、前祝いに乾杯の盃を打ち鳴らした。



鳥のさえずりが、眠りの浅くなった耳をくすぐる。

朝陽差し込む寝室の中、寢床で寝返りをうつた諏訪子は、その二の腕に柔らかないものを感じて身を起こした。

「ん……かなこ……？」

昨日は少し、飲みすぎたような覚えがあつた。何年ぶりの

二人酒に、つい夜半まで盃を傾けたせいか、軽い鈍痛が頭の芯に残っている。

重い臉を擦りながら、隣に目をやれば。

「……………っ!？」

寢床で丸まっていた小さな赤子と目が合った。

「だーうー」

「……………」

自分そっくりの、秋の稲穂のような髪の色。あどけない笑顔でこちらを見上げてくる小さな生命に、諏訪子の頬を無数の汗が流れ落ちてゆく。

「……………いや、いやいやいやいや」

まるで身に覚えがない。いや、ないわけではないが最後にそのした行為に至ったのはもう千年以上も昔、いわゆる神代のこととで――

「諏訪子っ!!」

「ひあ!？」

いきなり襖をふつ飛ばさんばかりに駆け込んできたもう一柱に、諏訪子は血の気も引く思いで振り向く。するとそこには今にも泣き出さんばかりに青ざめた神奈子。

そして――その胸には、やはり見覚えのある、蒼髪の小さな姿があった。

「す、諏訪子、どうしよう!! どうしようっ……………、子供が、

子供がでちゃった……」

「……………お前もかブルータス」

諏訪子は呻いて天を仰ぐ。

「……………そ、そんな覚えのないのに……………」

ミレニアム乙女の神奈子には、諏訪子以上に驚愕の出来事であつたらしい。昨夜の威厳も貫禄もどこへやら、神格崩壊の体で泣き出す始末。

そんな親の不安を敏感に感じ取ったか、抱きかかえられた赤子の泣き声が響きはじめる。

――どうやら、守矢神社の御利益に安産祈願と子孫繁栄が掲げられるようになるのはそう遠くなさそうであつた。

(了)

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

大⑨州東方祭では約2年ぶりの参加となります、折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『神様のつくりかた』は、早苗さんに赤ちゃんができたことに端を発して起きる騒動と、それを契機に人と神様の在り方について神奈子様や諏訪子様が悩んだりする一連の事件について描いた、当サークル十五冊目のSS本となります。

あくまで一般向けなので、それっぽい描写を期待された方はごめんなさい。……いないと思いますが。

本文では人と神様の在り方について、やけにシリアスなことを書いている部分もあったりしますが、概ねややこしい話は抜きにして楽しんで頂ければ幸いです。

今回も白身氏、Riza氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせて頂きます。

——それでは。
また次の機会にお会いできることを願つて。

【奥付】

「神様のつくりかた」

平成23年7月24日 大⑨州東方祭4

発行 折葉坂三番地オウハザカサンバンヂ
著者 銅おりはあめがね (<http://onhazakablog28.fc2.com/>)

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方Project」の二次創作です。



◆東方project Fanbook 2011.7.24 発行・折葉坂三番地◆

